

厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）
分担研究報告書

青年期・成人期の自閉スペクトラム症および注意欠如多動症の社会的課題に対応するプログラムの開発と展開

研究分担者 加藤 進昌 公益財団法人神経研究所研究部 所長

研究要旨

ASDは集団への適応や他者との関係継続を本質的に不得手とする。しかし、自分と似た特徴を持つ他の利用者と一定期間共に過ごすことにより、プログラム終了時点では凝集性の高まった集団となる。本研究ではASDショート・ケアプログラムおよびOB会での実践を基に、ASDに対するピアサポートを活用したプログラムを開発・実施し、その効果を検証する。令和2年度においては、プログラムに必要な要件を探るため、これまでのASDプログラムを修了した者を対象とする「探索的ヒアリンググループ」から、ピアサポートの概念理解、グループ運営に必要な要素や効果的な参加方法、運営の課題などについて、主に当事者がファシリテータを担当するなかで、ディスカッションを行うグループ形式でヒアリング調査を行っている。また、アンケートによる調査に加え、神経研究所において、東京都自閉症協会の幹部に対し、当事者会の現状について聴取している。これらの結果を基にして、令和3年度にはプログラムを開発、実施し、効果を検証していく。加えて、成人発達障害支援学会の協力のもと、ワークショップや情報共有などを通して、プログラムの全国化を図るとともにネットワークの構築を行う。

A. 研究目的

我々は青年期・成人の自閉スペクトラム症（以下、ASD）に対するショート・ケアプログラム（全20回）を全国に先駆けて開発・実施してきた。プログラムの効果に関して対人スキル獲得を中心とする技術的な側面に注目が集まりがちであるが、そのみでは高度なコミュニケーション能力を求められる社会に適応していくことは困難である。ASDプログラムが当事者の社会参加に寄与する中核的な要因の一つは、自分と似た仲間と出会い助け合えるというピアサポート効果にあるのではないかと申請者らは考えている。

ASDは集団への適応や他者との関係継続を本質的に不得手とする。しかし、自分と似た特徴を持つ他の利用者と一定期間共に過ごすことにより、プログラム終了時点では凝集性の高まった集団となる。プログラムの参加により他者を信頼できる感覚が醸成され、自己および他者に対する否定的な認知の改善やメタ認知の向上などの結果として、孤立から社会参加への行動の変容につながっていることが考えられる。プログラムを終了した参加者による半自助的な集まりであるフォローアップグループ（以下、OB会）がデイケア内にて複数開催されている（10グループ、80名）。成人ASDの当事者会は地域に複数存在するが、対人関係が引き金となり解散する当事者会が多く、プログラム終了者が適応しにくい状況がある。そのため、OB会を病院内で継続開催し、居場所支援をしているが、医療が半永久的に支援をし続けることは困難である。

そこで、本研究ではOB会の状況、当事者会に参加・運営する際にどのようなことが必要か調査をし、ASDショート・ケアプログラムおよびOB会での実践を基に、ピアサポートを活用したプログラム（以下、ピアサポートプログラムとする）を開発・実施し、青年期・成人ASD当事者に対する認知および行動の

変容について検証し、支援者向けのマニュアルを作成する。そのことにより、当事者会の安定した運営の手法の構築やファシリテータの養成を目指していく。

B. 研究方法

ピアサポートプログラムに必要な要件を探るため、当初予定していたヒアリング調査数（10名予定）を大幅に増加させた。これまでのASDプログラムを修了した者を対象として、昭和大学にて「探索的ヒアリンググループ（1.5時間/回）」を開催した。ピアサポートの概念理解、グループ運営に必要な要素や効果的な参加方法、運営の課題などについて、ディスカッション形式でヒアリング調査を行った。

これらに加え、昭和大学・神経研究所においてOB会参加者へのアンケート調査（OB会に参加して得られたこと、当事者が運営するにあたり必要な支援・スキル等）、神経研究所において、東京都自閉症協会の幹部に対し、当事者会の現状について聴取をした。

（倫理面への配慮）

本研究は昭和大学附属烏山病院・神経研究所における倫理委員会の承認を得て実施する。

C. 研究結果

「探索的ヒアリンググループ」は全12回開催（延べ18時間）し、延べ179名参加した。「探索的ヒアリンググループ」から得られた情報を表1に示す。「聴く」「話す」などの具体的なスキルに加え、安心してグループに参加するためのルールやファシリテータマニュアルの作成、ファシリテータが他参加者に対し意見を求めてもよいかイラストで意思表示をされている名札を作成する等構造に対する工夫について取り扱われた。

これらを基にして、OB会に対しアンケート調査を

開始し、26名から回答を得た。その結果、「OB会に参加して役に立ったこと」として、全体の7割強（“ややあてはまる”も含む）が「居場所・安心できる場所があると感じる」「生活が楽しいと感じる」と回答し、半数が「友人・知人を作りたいと感じるようになった」と回答した。当事者自身がグループを運営するにあたり必要な支援としては、「トラブル時の介入」が最も多く、次いで同数で「運営のサポート」、「情報提供」であった。グループ運営に必要なスキルとしては「自己理解」が最も高く、次いで「聴く」「トラブル対処」であった。また、東京都自閉症協会への聴取からは先駆的に自助グループを行っている12機関の紹介を受け、今後継続的に調査と連携を行っていくことになった。

「探索的ヒアリンググループ」は11回のヒアリングを経て終了したが、参加者の意向により当事者会として活動を継続することになり、これまで4回開催されている。

表1 ピアサポート 探索的ヒアリングプログラム
(延べ18時間、179名参加)

	タイトル	内容 (参加人数)
第1回 7/3	ピアサポートを感じるのはどんな時	ピアサポートの知識を共有し、仲間からのサポートが感じられる場面についてヒアリング (15名)
第2回 7/17	ピアサポートを促進するものとは	ピアサポートグループを阻害する要因、促進する要因についてヒアリング (13名)
第3回 8/7	ピアサポートを行うために必要な要素はなんだろう?	ピアサポートグループを運営するために求められる要素についてヒアリング (14名)
第4回 8/21	役割の理解	グループ運営を継続的に行うためにはさまざまな役割があるため、必要な役割や各自がどのような参画ができるかについてヒアリング (15名)
第5回 9/4	リフレーミング	物事を別の視点・角度から見する方法について知り、自分や他者の良い面に気付くことのメリット・デメリットについてヒアリング (20名)
第6回 9/18	聴く	グループ参加に必須となる「聴く(聞く、訊く)」方法について、他者に与える影響も含めて考える (16名)
第7回 10/2	共感性	共感性について学び、他者に共感または他者から共感されるためのグループへの

	タイトル	内容 (参加人数)
		参加方法についてヒアリング (14名)
第8回 10/16	自分のライフストーリーを振り返る	自己の経験を語ることで他者の助けになるため、自分がどの程度自己開示できるかを把握するため自分のエピソードを把握、整理する (15名)
第9回 11/6	グループ体験 Part 1 「言いつばなし、聞きつばなし」	自助会で用いられる方法で、ファシリテーター体験、参加者体験を通してメリット・デメリットについてヒアリング (17名)
第10回 11/20	グループ体験 Part 2 「困った感情に対処する1」	生活上で対処が難しい感情を決めて、その感情が生じる状況、対処法を考えるプログラム体験を行いメリット・デメリットについてヒアリング (15名)
第11回 12/4	グループ体験 Part 3 「困った感情に対処する2」	Part 2に Part 1の要素を取り入れて、グループ運営がしやすくなるかを確認する体験を行いメリット・デメリットについてヒアリング (13名)
第12回 12/18	グループ体験 Part 4 「ピアサポート」	精神科ショートケアで利用されている「自閉スペクトラム症専門プログラム」のマニュアルを用いた、ピアサポートプログラムの体験を行いメリット・デメリットについてヒアリング (12名)

D. 考察

探索的ヒアリンググループでは「聴く」「話す」などの具体的なスキルトレーニングに加え、安心してグループに参加するためのルールやマニュアルが作成された。ヒアリングが終了した現在も当事者会として継続的に開催されている。アンケート調査からはOB会から得られたものとして、「居場所・安心できる場所があると感じる」「生活が楽しいと感じる」と多くの者が回答した。ここから、当事者同士の自助的な活動は、帰属意識や対人希求性の促進に有意義であることが推察される。

またアンケート調査では、当事者自身がグループを運営するにあたり必要な支援として、「トラブル時の介入」「運営のサポート」「情報提供」が多く挙げられ、グループ運営に必要なスキルとしては「自己理解」「聴く」「トラブル対処」が多く挙げられた。

どちらの問いに対しても多く回答された「トラブル対処」については、グループ運営を主体的に行う経験の少なさや想定外の対処を苦手とする特徴が関与していると考えられる。役割を担う経験をしていくことに加え、探索的ヒアリンググループで話し合われた構造に対する工夫でトラブルを回避・対処できる可能性が高いと考えられる。また、「運営のサポート」「自己理解」「聴く」については個々人のスキル醸成も必要であると考えられる。

今後はプログラムを通して個々人のスキル向上を目指しながらも、グループ運営の“方法を学び経験を増やす”ことが求められるだろう。そうすることによって、当事者自身が運営への具体的なイメージを構築し、新たな課題を能動的に発見・対処検討する力を身につけていく支援を行うことで、グループ運営のモチベーションを高めるものと期待する。

本調査は2機関に対するものにすぎないため、東京都自閉症協会を通してつながった当事者会に対しても継続的に調査を行っていく必要もあると考える。

E. 結論

探索的ヒアリンググループおよびアンケート調査の結果からは、ASDにおけるピアサポートの重要性が示され、乗り越えるべき課題についても浮かび上がってきている。ASDでは障害特性から対人コミュニケーションが不得手であることから、自助的な活動の際には、一定のサポート、訓練、グループの構造化などの工夫が求められる。調査結果を更に解析、検討し、令和3年度はピアサポートプログラムの作成・実施を行っていく。プログラム前後での主観的評価（自己効力感、自尊心、共感性、精神的健康度、QOL等）を用いて変化を検証する。また、生じてきた課題に応じて、当事者団体へのヒアリングを行い、そこで得た知見も含めて、当事者が自助会に参加・運営するために必要な条件の検討・整備を行う。それらを成人発達障害支援学会の協力のもと、ワークショップや情報共有などを通して、プログラムの全国化を図るとともにネットワークの構築を行う。

我々が実践してきたASDショート・ケアプログラムは有効性が示され、これまでに多くの当事者を社会参加に繋げてきた。しかしながら、各地域における支援機関や当事者の状況は様々であり、多様な現状に対応するために発達障害専門プログラムに対する付加的なプログラムの提供が求められている。ピアサポートプログラムは、これまでのASDショート・ケアプログラムやOB会の実践のなかで、利用者の認知および行動を変化させる中核的な要因としてのピアサポートに着目してプログラムを構成する。発達障害は基本的には生涯にわたり特性が持続するものであり、支援の継続性を担保することは重要である。コミュニケーションスキルなどの技術的側面よりも心理的側面へのアプローチを重視し、利用者の自律的な活動の助けを得て、支援の継続性や居場所としての機能も強化できることが期待される。更には乱立する発達障害の当事者会に対し、支援機関内におけるモデルとして情報を提供することで、当事者会の質の向上につながることも期待される。

東京都の発達障害診療地域中核拠点(2020年度～)である神経研究所では、訪問診療も含めた発達障害の生活支援、ひきこもり支援を進めている。神経研究所が提示する東京都における発達障害支援の一つのモデルとし、昭和大学発達障害医療研究所が全国

ネットワークの中核として、発達障害診療専門拠点機関の全国化への道筋をつけていく。

F. 健康危険情報

該当なし

G. 研究発表

1. 論文発表

- 1) Fujino J, Tei S, Itahashi T, Aoki YY, Ohta H, Kubota M, Hashimoto R, Takahashi H, Kato N, Nakamura M. Role of the right temporoparietal junction in intergroup bias in trust decisions. *Human Brain Mapping*, 41(6):1677-1688, 2020.
- 2) Itahashi T, Fujino J, Hashimoto RI, Tachibana Y, Sato T, Ohta H, Nakamura M, Kato N, Eickhoff SB, Cortese S, Aoki YY. Transdiagnostic subtyping of males with developmental disorders using cortical characteristics. *Neuroimage Clinical*, 27:102288, 2020.
- 3) Ohta H, Aoki YY, Itahashi T, Kanai C, Fujino J, Nakamura M, Kato N, Hashimoto RI. White matter alterations in autism spectrum disorder and attention-deficit/hyperactivity disorder in relation to sensory profile. *Molecular Autism*, 11(1):77, 2020.
- 4) Yoshihara Y, Lisi G, Yahata N, Fujino J, Matsumoto Y, Miyata J, Sugihara G, Urayama S, Kubota M, Yamashita M, Hashimoto R, Ichikawa N, Cahn W, van Haren NE, Mori S, Okamoto Y, Kasai K, Kato N, Imamizu H, Kahn RS, Sawa A, Kawato M, Murai T, Morimoto J, Takahashi H. Overlapping but asymmetrical relationships between schizophrenia and autism revealed by brain connectivity. *Schizophrenia Bulletin*, 46(5):1210-1218, 2020.
- 5) Kubota M, Fujino J, Tei S, Takahata K, Matsuoka K, Tagai K, Sano Y, Yamamoto Y, Shimada H, Takado Y, Seki C, Itahashi T, Aoki YY, Ohta H, Hashimoto RI, Zhang MR, Sahara T, Nakamura M, Takahashi, H, Kato N, Higuchi M. Binding of dopamine D1 receptor and noradrenaline transporter in individuals with autism spectrum disorder: A PET Study. *Cerebral Cortex*, 30(12):6458-6468, 2020.
- 6) Yamashita A, Sakai Y, Yamada T, Yahata N, Kunitatsu A, Okada N, Itahashi T, Hashimoto R, Mizuta H, Ichikawa N, Takamura M, Okada G, Yamagata H, Harada K, Matsuo K, Tanaka SC, Kawato M, Kasai K, Kato N, Takahashi H, Okamoto Y, Yamashita O, Imamizu H. Generalizable brain network markers of major

- depressive disorder across multiple imaging sites. *PLoS Biology*, 18(12):e300096, 2020.
- 7) Itahashi T, Fujino J, Sato T, Ohta H, Nakamura M, Kato N, Hashimoto R, Di Martino A, Aoki YY. Neural correlates of shared sensory symptoms in autism and attention-deficit/hyperactivity disorder. *Brain Communications*, 2(2):fcaal86, 2020.
 - 8) Lin IF, Itahashi T, Kashino M, Kato N, Hashimoto R. Brain activations while processing degraded speech in adults with autism spectrum disorder. *Neuropsychologia*, 152:107750, 2021.
 - 9) Nobukawa S, Shirama A, Takahashi T, Takeda T, Ohta H, Kikuchi M, Iwanami A, Kato N, Toda S. Pupillometric complexity and symmetry follow inverted-U curves against baseline diameter due to crossed locus coeruleus projections to the edinger-westphal nucleus. *Frontiers in Physiology*, 12:614479, 2021.
 - 10) 加藤進昌. 発達障害支援の現状とこれから. *心と社会*, 51(1) (179): 4-5, 2020.
 - 11) 村上あゆみ、牧山優. デイケアでの就労支援プログラムについて. *心と社会*, 51(1) (179): 44-50, 2020.
 - 12) 満山かおる、川嶋真紀子. 心理カウンセリングの可能性. *心と社会*, 51(1) (179): 51-56, 2020.
 - 13) 加藤進昌. 発達障害支援のこれからを考える. *そだちの科学*, 34:32-37, 2020.
 - 14) 加藤進昌. 発達障害概念の誕生～歴史と国際分類の変遷～. *Biophilia*, 9(2):1-4, 2020.
 - 15) 加藤進昌. 自閉スペクトラム症とは何か～自閉症とアスペルガー症候群. *Biophilia*, 9(2):6-10, 2020.
2. 学会発表
 - 1) 加藤進昌. 大人の発達障害への理解と対応～特性を知り、長所を生かすには～. 消防大学校幹部科講義、東京・総務省消防庁消防大学校、2020/6/19
 - 2) 加藤進昌. 大人の発達障害への理解と対応～特性を知り、長所を生かすには～. 消防大学校幹部科講義、東京・総務省消防庁消防大学校、2020/8/21
 - 3) 加藤進昌. 大人の発達障害への理解と対応～特性を知り、長所を生かすには～. 消防大学校幹部科講義、東京・総務省消防庁消防大学校、2020/10/12
 - 4) 加藤進昌. 職場の発達障害～その理解と対応～. 日本うつ病センター東京都地域特性重点特化事業「職場のメンタルヘルス」シンポジウム、ウェブセミナー、2020/11/21
 - 5) 加藤進昌. 大人の発達障害とは何か～いきづらさの正体～. 所沢市健康推進部保健センター健康管理課こころの健康支援室、令和2年度第2回こころの健康講座、埼玉・所沢市保健センター、2020/12/18
 - 6) 加藤進昌. 発達障害と生物学的背景. 令和2年度東京都発達障害者支援体制整備推進事業 医療従事者向け講習会、東京・飯田橋レインボービル、2020/12/20
 - 7) 加藤進昌. 大人の発達障害への理解と対応～特性を知り、長所を生かすには～. 消防大学校幹部科講義、東京・総務省消防庁消防大学校、2021/1/18
 - 8) 加藤進昌. 大人の発達障害への理解と対応～病院経営とデイケア運営へのインパクト～. 陽和病院講義、東京・陽和病院、2021/1/25
 - 9) 加藤進昌. 成人の発達障害と障害者歯科. 東京都立心身障害者口腔保健センター主催障害者歯科認定医・認定歯科衛生士研修会、東京・東京都立心身障害者口腔保健センター、2021/2/7
 - 10) 加藤進昌. 成人期の発達障害の臨床～心理の本質の理解から社会的自立への支援まで～. 一般社団法人日本臨床心理士会 第14回障害の理解と支援に関する総合研修会(4)、オンライン、2021/2/21
 - 11) 加藤進昌. 精神科診療所における発達障害支援～グループワーク事始め. 令和2年度日精診・医療計画等検討プロジェクトチーム研修会、オンライン、2021/3/7
 - 12) 加藤進昌. 大人の発達障害の理解と支援 令和2年度障害福祉の理解研修「大人の発達障害の理解と支援」、オンライン、2021/3/22
 - H. 知的財産権の出願・登録状況
 1. 特許取得
該当なし
 2. 実用新案登録
該当なし
 3. その他
該当なし